

蝙蝠

小川健治

海に山の張り出した寺

通夜に遅れて本堂前

既に経はながれ

帰るにも帰られず

夕景色の中に立ちつくす

立っている、することもなしに

海側の工場には、いかにも近代的なあかり

山側に目を移せば蝙蝠五、六匹

はて蝙蝠の数詞は何だっけ

匹で良かったのかどうなのか



夕方の空に虫をねらって飛んでいるのだろう
久しぶりの蝙蝠に乱歩の少年探偵団を思い出す
通夜と関係無い事を想い経の了えるのを待つ
不謹慎な参列者が私

本葬の予定がアナウンスされる

本堂を出てくる人、その流れに逆らって本堂へ

永遠に目覚めぬ者の顔を見る

ああ白髪が増えましたね

やつれはしなかったんですね

手を合せ外へ出る

ふと思う、皆どんな気持で参列したのか

故人を記憶するためか

記憶と社会的存在であるところの人間——どこかで読んだような気もするが

今日の記憶がいつまで保存されるのか自分でもわからない

一人の人の一生が消える儀式に立ち会っているというのに

白髪を増やして生きてきた、そのわりに、やつれの目立たぬ顔のことも

日々の私の生活に上塗りされていくのだろう

もう一度空を見る

今夜の寺での夕飯は済んだか、こうもりとなった蝙蝠はやさしい顔で寝ぐらに帰ったの
だろう

蝙蝠はもはやいない